

＜編集部にて＞の訳

W: マイアー君、今日はあなたにすてきな仕事があるのよ。リュエーベックへ行っ、読者のためにハンザ同盟都市について報告してちょうだい。リュエーベックがハンザ同盟都市だってことは知ってるでしょ？

M: ヴェルナー編集長、それはドイツの子どもならだれでも知ってますよ。

W: あら、どうして？

M: 子どもの頃、車の登録標識に興味を持ちませんでしたか？

W: 車の登録標識？ 車に乗っているナンバンプレートのこと？

M: そのとおりです。車に乗っているのが退屈なとき、見知らぬ登録標識をつけた車がいっぱいどこからきているのか当てて暇つぶしをするんです。大都市ならすぐにわかります。たとえばミュンヘンなら「M」で、フランクフルトは「F」で、そのうち不思議に思うようになるんです。なぜハンブルクの標識は「H」じゃなくて「HH」なんだろうって。それはHansestadt Hamburg（ハンザ同盟都市ハンブルク）を表しているんですが、リュエーベックもまったく同じように「L」ではなくHansestadt Lübeckを表す「HL」なんです。

W: なるほど！ でもリュエーベックへ車で行くときは、まずは交通に注意を払ってね、車の登録標識じゃなくて！

W: さて、リュエーベックはどうだった？ 話してちょうだい！

M: リュエーベックは、本当に一目に値する町です。中世の建築様式で建てられた古い建物がたくさんあって、すばらしいんです。だから、リュエーベックは「ハンザ同盟の女王」とも呼ばれ、ユネスコによって世界文化遺産に認定されています。特に、リュエーベックの象徴となっているホルステン門はよく知られていますよね。

W: ええ、あの門は有名ね。多くの切手やコインのデザインにも使われているわ。

M: さらにリュエーベック近郊のトララヴエミュンデは、ドイツで最も重要なフェリー港のひとつなんです。

W: もちろんそうね。バルト海を経由して北欧や東欧へとつながる、そういった港があるおかげで、リュエーベックは「ハンザ同盟の女王」になったのね。でも詳しくいうと、それはどういうことなの？ ハンザ同盟とは何なのか、もう一度簡単な言葉で説明してちょうだい。

M: つまり、当時(13～17世紀頃)、通常は皇帝や王様、あるいは侯と呼ばれる領主

が、ひとつの国や諸都市を支配していたんですが、たとえばハンブルクのような自由都市もあったんです。つまりそういう都市は、市民が自分たちで税金や法律について決定する権利を持っていてたわけです。それは領主たちが諸都市に与えた特別な権利でした。そういった都市のいくつかが結んだ、ある商業同盟が、いわゆるハンザ同盟。ハンザ同盟には、スカンジナビアを経由してロシアに至るヨーロッパ中の都市が参加していたんです。

W: つまり当時、非常に広範囲にわたるひとつの貿易ネットワークが作られたというわけね。

＜雑誌記事＞の訳

リュエーベックとハンザ同盟

ハンブルクやブレメメンと並び、リュエーベックは、ドイツにおける最も有名なハンザ同盟都市です。ハンザ同盟は、文書による定款を持たない利益共同体でした。それによって、ロンドン(イギリス)からノヴゴロト(ロシア)に至る国際的な貿易ネットワークが成立したのです。14世紀半ばには、リュエーベックがこの都市同盟の盟主を務めました。そのことが政治的な権力と結びつくことはありませんでした。しかしハンザ同盟内で貿易に関する争いが起こった場合は、リュエーベックにあった裁判所に裁決がゆだねられたのです。貿易によって富が増大するとともに、多くの商人たちの自意識も増していき、その結果、都市市民階級が台頭する最初の兆しが生じました。

リュエーベックという町が生んだ、最も有名な息子たちと言えるかもしれないのは、ハインリヒおよびトーマス・マン兄弟です。リュエーベック市民階級の衰退が、著名な小説『ブッデンブローク家の人々』の中心テーマでした。この小説でトーマス・マンはノーベル文学賞を受賞しています。

一見の価値ある中世の建築を有することで、リュエーベックはその象徴であるホルステン門とともに、ユネスコによって世界文化遺産に指定されました。

リュエーベックがハンザ同盟都市であることは、とりわけリュエーベックの自動車登録標識を通して、ドイツ人の記憶に残っています。驚いたことにそれは、「L」ではなく、「H」で始まります。つまりハンザ同盟都市リュエーベック (Hansestadt Lübeck) を略して、HLと書くのです。

(トーマス・マイアー)